「昔のかむざしの端を折る」考

山本利達*

要旨

源氏物語「絵合」の巻で、冷泉帝の御前で斎宮女御方と弘徽殿女御方の絵合が行われることになった時、それぞれ絵の準備がなされた。その折、朱雀院から、昔のすぐれた絵師の描いた年中行事の絵や、自らの御代の事も描かせた絵を斎宮女御に贈られた。斎宮女御は「昔の御かむざしの端をいささか折りて」それを添えてお礼の歌を返した。「昔の御かむざし」とは、かつて斎宮が伊勢に下向した時朱雀帝から贈られた儀式上の黄楊の櫛である。それをどうして「昔の御かむざし」といったのか。また、その「端をいささか」折って贈ったのはなぜか。『花鳥余情』が「長恨歌伝」の「為我謝太上皇といひて旧好を尋ねし事」によるという説が多く用いられてきたが、現代ではそれによるとする説が少ない。「かむざし」は作者にとっては唐風な女性の装束として用いられていることを述べ、「長恨歌伝」の本文によったものとして読むべきものと思われることを述べる。

一

源氏物語「絵合」の巻で、斎宮女御方と弘徽殿女御方との物語絵の絵合が、中宮御前で行われたが、その決着がつかず、日をあらためて、両者の絵合が冷泉帝の御前で行われることになった。そのため、両者共に絵の準備が進められた。その事を知った朱雀院は、昔の上手な絵師が年中行事を興味深く描いたものに、醍醐天皇が詞書をお書きになったものや、朱雀院の御代の事も描かせた絵巻を加え、その中に、斎宮が伊勢に下向した折の大極殿の儀式を公茂に描かせられたすばらしいのを献上なさった。

使者は、朱雀院の殿上人である左近の中将で、お便りはただ口上のみであったが、斎宮下向の日に、大極殿に興が寄せられた絵に、

身こそかくしめの外なれそのかみの心のうちを忘れしもせず（絵合一〇七頁―新潮日本古典集成による。以下同じ。但し、「かむざし」の語は仮名書にする。）

とだけ書いてあった。斎宮女御は、返歌をしないのは恐れ多いので、詠みづらく思いながら、次のようにお礼を述べた。

(1)昔の御かむざしの端をいささか折りて、

しめのうちは昔にあらぬここちして神代のことも今ぞ恋しき

とて、縹の唐の紙に包みて参らせたまふ。（絵合一〇八頁）

斎宮女御は、朱雀院の厚意にみちた贈物に添えられた歌に返歌するに当って、「昔の御かむざしの端をいささか折りて」「しめのうちは」の返歌を渡した。「昔の御かむざしの端をいささか折りて」渡したのはどうしてだったのであろうか。

平成7年9月21日受理　*文学部国文学

『河海抄』は、

取金釵鈿合各折其半授使者曰為我謝太上天皇謹献是物尋旧好也長恨歌（玉上琢弥編『紫明抄河海抄』による）。

「長恨歌」からの引用とあるが、陳鴻の「長恨歌伝」による文である。

『花鳥余情』は、

楊貴妃かのかんさしを半おりて方士にさつけて為我謝太上皇といひて旧好を尋ねし事を思よせ侍り朱雀院もいま太上皇にてましまし故なり（『源氏物語古注集成』による）。

これも「長恨歌伝」の本文によっている。

『細流抄』は、

花鳥尤有興有味者也（『源氏物語古注集成』による）。

といっている。『河海抄』も『花鳥余情』も共に「長恨歌伝」を引いているのに、『細流抄』が、「花鳥尤有興有味者也」というのは、「朱雀院もいま太上皇にてましまし故なり」という指摘を評価したのであろうか。『孟津抄』『明星抄』『岷江入楚』『萬水一露』『湖月抄』賀茂真淵『源氏物語新釈』等の注釈は、『花鳥余情』の注を引き、「長恨歌伝」によるものとしている。ところが、現代の注釈書においては、『対校源氏物語新釈』『日本古典文学大系』玉上琢弥先生の『源氏物語評釈』『日本古典文学全集』『新潮日本古典集成』『完訳日本の古典』等には、「長恨歌」乃至「長恨歌伝」との関係を指摘されていない。松尾聡氏の『全釈源氏物語』では、『花鳥余情』の説のように考えることは疑問だとされている。現代の注釈書の中では、わずかに、『日本古典全書』『新編日本古典文学全集』『新日本古典文学大系』は、「長恨歌」によるもの、乃至は「長恨歌の故事に倣うか」とされている。

現代になって、「長恨歌」によるという注が少なくなったのは、なぜだろうか。斎宮女御のために、源氏が手許の物語絵を選んだ時、「長恨歌、王昭君などやうなる絵は、おもしろくあはれなれど、ことの忌みあるは此度はたてまつらじと選りとどめたまふ」（絵合一〇一頁）と述べているように、「長恨歌」は縁起のよくない物語として源氏が割愛したことを思い、作者は、斎宮女御の行為にも「長恨歌伝」に依拠したことはさせないだろうとの考えからなのであろうか。以下、このことについて考えてみたい。

玉上先生の『源氏物語評釈』の注では、「昔の御かんざし—あのおりにお使いになった釵」とある。『新潮日本古典集成』では、「昔の御釵（かむざし）」と「かむざし」に「釵」の字を用いられ、注では、「下向の時の別れの櫛（黄楊の小櫛）」とあるが、櫛がなぜ釵といわれたのか明らかでない。

『日本古典文学大系』で、「『かむざし』は『髪刺し』の音便で、ここは櫛。いわゆる釵（かんざし—簪）ではない」とあり、松尾聡氏の『全釈源氏物語』『日本古典文学全集』『完訳日本の古典』では、「髪刺し」説によっていられる。『新日本古典文学大系』と『新編日本古典文学全集』は「長恨歌」に依拠したとされながら、「髪刺し」説により、「長恨歌」の「釵」との関係が示されていない。

『源氏物語大成』の索引篇では、「かんざし」には、「［髪］（名—髪ノ状ニイフ）」と、「［髪挿］（名）」と二項がたてられている。絵合の例以外の後者の用例を挙げてみよう。

(2)亡き人の住処尋ねいでたりけむ、しるしのかむざしならましかば、と思ほすも、いとかひなし。

尋ねゆく幻もがなつてにても魂のありかをそことしるべく

（桐壺二七頁）

(3)中宮よりも、御装束、櫛の筥、心ことに調ぜさせたまひて、かの昔の御髪上の具、ゆゑあるさまに改め加へて、さすがにもとの心ばへも失はず、それと見せて、その日の夕つかたたてまつれさせたまふ。

宮の権の亮、院の殿上にもさぶらふを御使にて、姫宮の御方に参らすべくのたまはせつれど、かかる言ぞ、なかにありける。

さしながら昔を今に伝ふれば玉の小櫛ぞ神さびにける

院、御覧じつけて、あはれにおぼし出でらるることもありけり。あえものけしうはあらじとゆづりきこえたまへるほど、げにおもだたしきかむざしなれば、御返りも、昔のあはれをばさしおきて、

さしつぎに見るものにもが万世を黄楊の小櫛の神さぶるまで

とぞ祝ひきこえたまへる。（若菜上三五～三六頁）

(4)「その炎なむ、誰ものがるまじきことと知りながら、朝露のかかれるほどは、思ひ捨てはべらぬになむ。目蓮が仏に近き聖の身にて、たちまちに救ひけむ例にも、え継がせたまはざらむものから、玉のかむざし捨てさせたまはむも、この世には恨み残るやうなるわざなり。……」（鈴虫三六〇頁）

(5)あはれなりける人かな、かかりけるものを、今まで尋ねも知らで過ぐしけることよ、これよりくちをしからむ際の品ならむゆかりなどにてだに、かばかりかよひきこえたらむ人を得ては、おろかに思ふまじきここちするに、ましてこれは、知られたてまつらざりけれど、まことに故宮の御子にこそはありけれ、と見なしたまひては、限りなくあはれにうれしくおぼえたまふ。ただ今もはひ寄りて、世の中におはしけるものを、と言ひなぐさめまほし、蓬萊まで尋ねて、かむざしの限りを伝へて見たまひけむ帝は、なほいぶせかりけむ、これは異人なれど、なぐさめ所ありぬべきさまなり、とおぼゆるは、この人に契りのおはしけるにやあらむ。（宿木二六三頁）

(2)は、亡くなった桐壺更衣の里に帝の使として靫負の命婦が訪れた時、更衣の形見として残してあった「御装束一領、御髪上の調度めく物」が贈られた。それを見ての帝の感慨である。「このころ、明け暮れ御覧ずる長恨歌の御絵、亭子院の書かせたまひて、伊勢、貫之にませたまへる、大和言の葉をも、唐土の詩をも、ただその筋をぞ、枕言にせさせたまふ」（桐壺二二六頁）。このような帝の(2)の感慨は、「長恨歌」の「唯将二旧物一表二深情一。鈿合金釵寄将去。釵留二一股一合一扇。釵劈二黄金一合分レ鈿。但令三心似二金鈿堅一。天上人間会相見」によっている。

(5)は、薫が浮舟を宇治ではじめて垣間見た時の思いである。「蓬萊まで尋ねて、かむざしの限りを伝へて見たまひけむ帝」とは、(2)と同じく「長恨歌」の方士が帝の要請で亡き楊貴妃を尋ね求め、蓬萊で会い、鈿合金釵を得て来たことによる。

(3)は、女三宮の裳着の折のことである。秋好中宮の入内に当り、朱雀院から贈られた「かの昔の御髪上の具」を「ゆゑあるさまに改め加へて、さすがにもとの心ばへも失はず、それと見せて」女三宮に贈った。秋好中宮の入内に当り、朱雀院から贈られたものは、「えならぬ御よそひども、御櫛の筥、打乱の筥、香壺の筥ども、世のつねならず、くさぐさの御薫物ども、薫衣香、またなきさまに、百歩の外を多く過ぎ匂ふまで、心ことにととのへさせたまへり」（絵合九三頁）とあるように、装束、櫛の筥、打乱の筥、香壺の筥、あるいは種々の薫物であった。かの「御櫛の筥」の一つには、「挿櫛の筥」（絵合九四頁）があった。「かの昔の御髪上の具」は、この一双の櫛筥に入っていた筈である。秋好中宮の贈ったものに添えられた歌では、「玉の小櫛」といっているのに、それを見た朱雀院は「おもだたしきかむざし」と思い、返歌では「黄楊の小櫛」といっている。『日本古典文学大系』は、本文を「かむざし」とし、傍注に「櫛」とある。玉上先生の『源氏物語評釈』では、本文は「かんざし」とあり、口語訳で「櫛」とある。『日本古典文学全集』『完訳日本の古典』では、本文は「釵（かむざし）」とあり、訳では「櫛」とある。『新潮日本古典集成』では、本文を「釵（かむざし）」とし、直接の注はないが、「玉の小櫛」について、「斎宮下向の折、

帝が手ずから斎宮の額に挿された黄楊の小櫛のこと」とあり、『新日本古典文学大系』でも、同様の解釈がなされているが、(1)に「昔の御かむざしの端をいささか折りて」とあり、「昔の御かむざし」は斎宮伊勢下向の折の「別れの櫛」のことだから、端を折った櫛を女三宮の裳着に贈る筈がない。

『類聚雑要抄四』によると、櫛筥一雙の甲筥の身に納れられる小筥廿二合の明細のなかに、「一合〈鈒子一枚。単功二疋。〉二合〈同鈒子緒二筋。各一筋。〉一合〈差櫛二枚。金也。単功六疋。〉」とあり、乙筥の身に納れられる小筥廿一合の明細の中に、「一合〈彫櫛二雙〉」とある。そして、図に附せられた説明によると、「鈒子銀一両二分。〈単功三疋〉髪上時用之」とある。「鈒子」は『丹鶴図譜』や東京国立博物館蔵『類聚雑要抄』によれば、「鈒子」とあり、図によっても「鈒子」であろう。又、「差櫛銀二両。〈単功四疋。〉同時用レ之。」とある。更に、「彫櫛」に附せられた図には、「彫櫛形。黄楊用レ之。髪上時用レ之。」とある。差櫛も彫櫛も髪上に用いられるが、前者は銀製であり、後者は黄楊で作られたものである。(3)の二首に詠まれたものは、彫櫛であったようである。それをどうして「かむざし」といったのであろうか。髪上げの折、髪に挿すから「かむざし」といったのであろうか。二首の歌にいうように櫛といってもよいであろうに、なぜ「かむざし」といったのであろうか。歌で「かむざし」と詠まれた例がなく、歌では「くし」と詠むことになっていたのであろうか。

『類聚名義抄』で「カムザシ」の訓のある字は、「簪、笄、鈒、鐳、鈿」である。「鐳」と「鈿」は、「鐳鈿〈谷正〉」として、「フサク、チリハム、ケツル、サラヒ、カネノハナ、ツタフ、カムサシ、「一甸又田」」とあり、髪に挿す金属製の具らしい。「簪」は、十巻本『和名抄』に、

簪　四聲字苑云。簪〈作含反。又則岑反。加无左之。〉挿レ冠釘也。蒼頡篇云。簪笄也。釈名云。笄係。所二以拘レ冠使レ不レ墜也。

二十巻本『和名抄』も殆ど同じである。「簪」と「笄」は冠が落ちないように冠と髪に挿す釘で男子使用のものである。ところが、『新撰字鏡』によれば、

鈒〈楚佳反。笄也。女具也。鎗也。波佐弥也。〉

とある。「ハサミ」の訓は、『和名抄』では、「鈒子」と「鈒刀」にあり、『類聚名義抄』では、「釗、鐵、鈒、鈒子、鏞」にある。「鈒」の訓を『新撰字鏡』で「波佐弥」としたのは不審である。あるいは、字形の相似から「鈒」と混同したのであろうか。ともあれ、(2)と(5)の「かむざし」は「長恨歌」の「鈒」によっていた。『新撰字鏡』の「鈒」は「女具也」というのと合致する。

諸種の索引による限り、上代文献に「かむざし」の例がみえない。平安朝の仮名作品の中にも用例は少ない。源氏物語の中の五例の外には、古今集に一例と、紫式部日記に一例、浜松中納言物語に四例を見る程度である。古今集には、

(6)五せちのあしたにかむざしのたまのおちたりけるを見て、たがならむととぶらひてよめる　　河原の左のおほいまうちぎみ

ぬしやたれとへどしら玉いはなくにさらばなべてやあはれとおもはむ（八七三）

八七二番は、「五節のまひひめを見てよめる」有名な「あまつかぜ雲のかよひぢ吹きとぢよをとめのすがたしばしとどめむ」だから、八七三番の「かむざし」は五節の舞姫のものであろう。

『類聚雑要抄』第三〈五節雑事〉には、

(a)一理髪具。

末額髪二流。〈末七尺。但不レ注二定文一内々事也。〉簪。鈒子。彫櫛二枚。本結。日蔭髪。

『雅亮装束抄一』の「五せち所のこと」に、

(b)その火おけのまへに。すへなうさうかいをやないばこのふたにをきて。ゑりぐしまきぐしかんざしをぐして五せち所ごとにをきまつるなり。ひめ君のれうなり。

また、「ひめ君のさうぞく」の中に、

(c)とらの日。あをいろのからぎぬ。むらさきすそごのも。でいゑ。すはうのあやのうちぎひとかさね。こきうちぎぬ。こきはかま。あをいろのあふぎ。めぞめのくんたい。ひれおり物。むらさきのいと。これにあたらしくまうくべし。すゑ。ひたひ。かみあげまうく。かんざし。さいし。四すぢあるを本所にまうく。からぐし。したぐし。ゑりぐし。こぐし。しかい。これらはくら人がたにまうく。

(d)わらはしもづかいのさいし。ひめ君のかづらかむざしさしぐしとりぐして。うちみだりのはこのふたにいれて二かゐにおくべし。

とある。(d)では、「かむざし」と「さしぐし」を区別している。この「さしぐし」は、(b)の「ゑりぐし」「まきぐし」、(c)の「からぐし」「したぐし」「ゑりぐし」「こぐし」を総称したのであろうか。

『類聚雑要抄』も『雅亮装束抄』も、「簪（かんざし）」と「釵子（さいし）」とを区別している。釵子は二股である。遺品として法隆寺伝来の釵子（東京国立博物館蔵）は二股で股の中央に飾りが着いている。それに対し、京都　稲荷山出土「耳掻付簪」（東京国立博物館蔵）は二股であるが、奈良原出土の耳掻付簪（東京国立博物館蔵）は一本足である。平安時代の簪はほとんど残っていない。[注2] 薬師寺の「吉祥天女像」のように、花の造り物を差したものが女性の簪であったのかと思われる。

枕草子「あさましきもの」の段に、「刺櫛すりて磨く程に、ものにつきさへて折りたる心地。」とある。これによれば、刺櫛は一本足だったらしい。刺櫛は、女性用の一本足のものだったということになろう。(6)の「かむざし」は二本足のものであったのか、一本足のものだったのだろうか、明らかでない。

浜松中納言物語に見える「かむざし」の四例は、(ア)唐の后、(イ)唐の国の一の大臣の五の君、(ウ)唐の后の女房等のものであり、もう一例は、一の大臣の五の君の歌に出てくるもので、すべて唐の女性にかかわるものである。

紫式部日記には、

(7)御帳の東おもて二間ばかりに、三十余人ゐなみたりし人々のけはひこそ見ものなりしか。威儀の御膳は、采女どもまゐる。戸口のかたに、御湯殿のへだての御屏風にかさねて、また南むきに立てて、白き御厨子ひとよろひにまゐりすゑたり。夜ふくるままに月のくまなきに、采女・水司・理髪ども、殿司・掃司の女官、顔も知らぬをり。闈司などやうのものにやあらむ、おろそかにさうぞきけさうじつつ、おどろのかんざし、おほやけおほやけしきさまして、寝殿の東の廊、渡殿の戸口まで、ひまもなくおしこみてゐたれば、人もえ通りかよはず。（新潮日本古典集成三一頁）

これは、敦成親王誕生五夜の産養の記事である。「おどろのかんざし」は、益田勝実氏が指摘されたように白楽天の「秦中吟」の「議婚」の詩句「荆釵」による表現であろう。[注3]

(2)と(5)の「かむざし」が「長恨歌」による「釵」であり、(7)の「かんざし」が、「秦中吟」による「釵」であることは、紫式部には、「かむざし」の語は「釵」と結びついていたようである。しかも、(7)に「おどろのかんざし、おほやけおほやけしきさまして」とあるように、唐様の公式な装束においては釵が挿されるものであった。このことを思うと、(3)の文章の少し前に、女三宮の裳着について、「御しつらひは、柏殿の西面に、御帳、御几帳よりはじめて、ここの綾錦まぜさせたまはず、唐土の后の飾りをおぼしやりて、うるはしくことことしく、かかやくばかりととのへさせたまへり」（若菜上三四頁）とあ

ることは見逃せない。女三宮の裳着の日のしつらいは、「唐土の后の飾り」を想像し、そのイメージに合致させようと「うるはしくことことしく、かかやくばかり」にしたというのである。しつらいがそうなら、装束も「唐土の后」のようにと考えられたであろう。「唐土の后」の髪に挿すのは、「釵」でなくてはならない。(3)において、秋好中宮から贈られた櫛を「おもだたしきかむざし」と朱雀院が思ったのは、「唐土の后」の装束にと思う朱雀院の要請による見立てであったというべきであろう。それは単なる見立てでなく、将来、女三宮を準太上天皇の源氏にとの思いからくる配慮であったとみられよう。

『花鳥余情』は、「もろこしのきさきのかさりを」の注に、次のように述べている。

周礼二后六服褘衣褕狄闕狄鞠衣展衣褖衣といへり。長恨歌伝云。又命戴ギ歩揺ヲ垂二金璫ヲ明年冊為二貴妃ト一半ス二后服用ヲ一云々。

「長恨歌伝」にいうように、歩揺を戴き金璫を垂れ、后の服と同等にとの思いを作者は朱雀院に抱かせていたのであろう。

秋好中宮から贈られた櫛が、「唐の后」の刺す「釵」に見立てられたのであれば、秋好中宮の公的装束における髪飾りは釵でなくてはなるまい。

(4)は、六条御息所が死後も成仏できずに苦しんでいることを耳にした秋好中宮が、出家して母の苦しみを救いたいと、源氏にもらしたのに対する源氏の言葉である。「玉のかむざし捨てさせたまはむ」というのは、中宮として釵をさしていた髪を落すことであり、(4)の「かむざし」も釵が想定された語であったといえよう。

以上のように、(1)の「かむざし」以外の源氏物語の「かむざし」が釵であるならば、(1)の「かむざし」も釵として理解する道を考えるのが自然であろう。

「昔の御かむざし」は、「昔の」と冠しているから、伊勢下向の際の「別れの櫛」である。

斎宮は十四にぞなりたまひける。いとうつくしうおはするさまを、うるはしうしたてまつりたまへるぞ、いとゆゆしきまで見えたまふを、帝、御心動きて、別れの櫛たてまつりたまふほど、いとあはれにて、しほたれさせたまひぬ。（賢木一三七頁）

『江家次第』に、「此櫛先仰二作物所一以二黄楊木一令レ作。長二寸許一」とあるように、「別れの櫛」は黄楊の櫛である。それを(1)で「かむざし」といったのは、「長恨歌伝」の「定レ情之日授二金釵鈿合一以固レ之」により、「金釵」に擬せられたからであろう。

「昔の御かむざしの端をいささか折りて」については、『花鳥余情』が、「楊貴妃かのかんさしを半おりて方士にさつけて為我謝太上皇といひて旧好を尋ねしことをおもひよせ侍り」と注した通りであろう。「長恨歌伝」では、「取二金釵鈿合一。各折二其半一。授二使者一曰。為レ我謝二太上皇一。謹献二是物一。尋二旧好一也」とある。「折二其半一」に擬して「端をいささか折りて」ということになったのだといわざるをえない。絵合の本文にはないが、「謝二太上皇一」―朱雀院の厚情に感謝し、「尋旧好」という「長恨歌伝」の故事によりかかった表現であろう。『続国訳漢文大成』の「長恨歌伝」は、塩谷温氏訳で、関連部は、「為に太上皇に謝せよ、謹んで是物を献じ旧好を尋むと」とある。『中国古典文学大系』の「長恨歌伝」は、前野直彬氏の訳で、「つつしんでこの物を献上いたし、昔のよしみをしのびます、と」とある。明暦三年林和泉掾刊『白氏文集』では、「為二謝セヨ一太上皇一謹ンテ献セヨ一是ノ物ヲ尋ントナリ一旧ヨシミ好一也」とある。「好」に「ヨシミ」と訓があり、「尋」には訓みがないが、『花鳥余情』と同様「タヅネン」と読んだものと思われる。

ともあれ、「端をいささか折りて」は、伊勢下向の時以来示された朱雀院の厚情をしのんでいることを示したのだと読まなくてはなるま

い。それ以外に、「端をいささか折りて」の理由が考えられるであろうか。斎宮女御にとって「長恨歌伝」をふまえて朱雀院へ感謝することは忌むべきことではなかったと思われる。

注

（1）割注は〈　〉により一行書に示す。
（2）『日本の美術』第二十三号「結髪と髪飾」九二頁による。
（3）「紫式部の身分㈠」（日本文学一九七三―三）
（4）平岡敏夫、今井清氏校定『白氏文集』によれば、「為我謝」と校定し、「我字　各本無。摺本・広記本・慶長本亦無。今従金沢本・正安本・管見抄本・英華本。」とある。

Research on *bending a piece of the ritual comb*

Ritatsu YAMAMOTO